

2022年12月4日降臨節第2主日

イザヤ書 11章 1-10節

ローマの信徒への手紙 16章 4-13節

マタイによる福音書 3章 1-12節

この度は、新型コロナウイルスによるわたしの体調不良で、みなさまには大変ご迷惑をおかけして、申し訳ありませんでした。体調はすっかり回復しておりますので、本主日から復帰したいと思います。

新しい教会歴、降臨節もすでに第二主日になりました。二本目のろうそくが点灯しておりますが、その意味も各説あります。ただし、本日の聖書日課、共通の主題を挙げるとするならば、「正義」あるいは「預言」になると思います。

旧約日課の「イザヤ書」です。「イザヤ書」について、先週の旧約日課でもその2章から学びました。本日の箇所は、そこよりも少し後の部分です。前回は、世界史的な規模の周辺世界の動きの中で、決定的な時が訪れた時、小国に過ぎないイスラエルの主なる神様から、多くの国々が学ぶ。そして、そこにまことの平和があるという預言から学びました。本日の箇所もその趣旨は継続しています。大国が勢力を競い合う歴史の流れの中で歩み続ける、主なる神様の民であり小さな集団であるイスラエル、そしてそのイスラエルに未来、訪れると思われる滅びに関する預言を通して、まことの平和が示されています。

2章から本日の箇所までを、簡単に触れてみますと、3章には、エルサレムとユダに対する審判の言葉があります。しかし、4章には「その日には、イスラエルの生き残った者にとって主の若枝は麗しさとなり、栄光となる。この地の結んだ実は誇りとなり、輝きとなる。」(イザヤ4:2)と、滅びは経験しても、エルサレムの残りのから希望が生まれることを示しています。そして5章に入ると、「新共同訳聖書」以降明確になった、類似する音の言葉を用いた「イスラエルの家は万軍の主のぶどう畑、主が楽しんで植えられたのはユダの人々。主は裁き(ミシュパト)を待っておられたのに、見よ、流血(ミスパハ)。正義(ツェダカ)を待っておられたのに、見よ、叫喚(ツェアカ)。」(イザヤ5:7)という部分があり、主なる神様の思いとイスラエルの実態の違いが示されます。

そのような中で、預言者イザヤの召命があり(6章)、そして、主なる神様のみを信じることの大切さを示すしるしとして、インマヌエル預言があり(7章)、それが再び呼びかけられます(8章)。そして、8章の末からダビデ王とその系譜への言及につながり、9章に入ってもそれが続きます。そして、主なる神様のみへの信頼の強調と、ダビデの系譜を前提として、「闇の中を歩む民は、大いなる光を見、死の陰の地に住む者の上に、光が輝いた。」(イザヤ9:1)という有名な言葉が語られます。さらに、アドベントの時期

において、わたしたちに心に残る言葉である、「**ひとりのみどりごがわたしたちのために生まれた。ひとりの男の子がわたしたちに与えられた。**」(イザヤ9:5)という預言が続きます。9章～10章は、同じイスラエルでありながら異教の王国と同盟を組む北イスラエルへの批判、そしてその同盟相手であるアッシリアへの批判があり、本日の箇所が続きます。そして、再び10章末には「**その日には、イスラエルの残りの者とヤコブの家の逃れた者とは、再び自分たちを撃った敵に頼ることなく、イスラエルの聖なる方、主に真実をもって頼る。**」(イザヤ10:20)とあり、北イスラエル・南ユダ王国、両方が滅びを経験したとしても、再び主に信頼する信仰が起き上がるような表現があります。ただし、アッシリアを恐れるなという発言がありますので、南ユダ王国の滅びはまだ前提としていないのかもしれませんが。これらを経て、本日の箇所となります。

本日の箇所は、「**エッサイの株からひとつの芽が萌えいで、その根からひとつの若枝が育ち**」(イザヤ11:1)という預言の言葉から始まります。「株から一つの芽が萌え出でる」この表現から、植物についてあまり知識のないわたしは、なんとなく、のどかな光景を浮かべてしまうのですが、そうではないようです。エッサイとは、ダビデの父のことですが、それはダビデ王の系譜を意味し、さらにはイスラエル王国全体、そしてそれを受け継ぐ南ユダ王国全体を示しています。それが「株」という言葉で表現されているのですが、この言葉は日本語と同じく、植物の「株・根」そのものを意味し、そこから「起源」「系譜」などを間接的に意味します。しかし、同時に、「切り株」をも意味しますので、その意味では、切り倒された株から、若枝が出ているという光景となります。「株」という言葉を、「系譜」ととるか、「切り株」ととるかで意味が変わりますが、若枝は、なんらかの人物のしるしであることは確かです。それゆえ、それがダビデ王の系譜という、一つの系譜から希望の若枝が出るという意味とも、一度切り倒された切り株から「若枝」が出るという意味ともとれます。どちらなのかを決定するのか困難ですが、「若枝」に希望を託していることから、安定した大木がそのまま成長し続けるイメージを語ってはいないことは確かです。

この預言の言葉は、主なる神様はイスラエルが、小さな大木?のような存在であることを望んでいたが、実態はそうはならなかった。そして、木としてのイスラエルはいったん終了する。しかし、それでもイスラエルが主なる神様を信頼する時、枯れたまま終わることはない。「若枝」たる人物を通して、そこにつねに希望がある、そのように示していると思います。

さて、その「若枝」である人物についても、「**その上に主の霊がとどまる。知恵と識別の霊、思慮と勇気の霊、主を知り、恐れ敬う霊。**」(イザヤ11:2)と、彼が、主なる神様の霊に満たされたからこそ、み心にかなうことが可能となることが示されます。そこで語られる「知恵」、「識別」、「思慮」、「勇気」どれをとっても人物形成に大切な要素です。しかし、最後にある「主を知り、恐れ敬う」ことが、最も大切な事柄です。これがなければ、先に出た四つの

要素が、どれほど高かったとしても、主のみ心にかなうことはできないのです。それゆえに、再度、3節以降「彼は主を畏れ敬う靈に満たされる。目に見えるところによって裁きを行わず、耳にするとところによって弁護することはない。」と続きます。「目に見えるところ」、「耳にするとところ」これらは、その通りに人間が何かを判断するための情報を意味しています。イザヤがこのことを語った時代に比べれば、現代は遥かに多くの情報を得ることができると思います。しかし、ここではそれが「主を知り、畏れ敬う靈」に満された行為の結果であることを示しています。言い換えれば、わたしたちがどれほど多くの情報をどれほど早く得られたとしても、大切な事柄は「主を知り、畏れ敬う靈」に導かれることなのであることは変わりないということです。

そして、5節には「正義をその腰の帯とし、真実をその身に帯びる。」と述べられます。「正義」は、主なる神様の正義であり、人間の政治・思想的な事柄にもとづく正義ではありません。次にくる「真実」は、「信じる」という動詞と同じ語根と言葉です（有名な個所では、「アブラハムは主を信じた。主はそれを彼の儀と認められた」（創15:6）があります）。『聖書（旧約）』では多くの箇所ですること同じく「真実」と訳してありますが、「ハバクク書」2章4節では「信仰」と訳してあります。ここで大切なことは、「真実」とは、主なる神様に対して真実であることです。つまり、心の底から本質的に誠実であり続けることで、自分とは別に一般的真理や原理に対して真実であることではありません。エッサイの根からの「若枝」と呼ばれる人は、そのような「真実」があるからこそ、彼は「正義」を帯びることができるのです。ここに彼がまことの平和をもたらすことができる重大な点があります。

6節以下は、「狼は小羊と共に宿り、豹は子山羊と共に伏す。子牛は若獅子と共に育ち、小さい子供がそれらを導く。」と始まり、そこには2章の時に見た、まことの平和と同じような情景が続いています。最終的に9節において「わたしの聖なる山においては、何のものも害を加えず、滅ぼすこともない。水が海を覆っているように、大地は主を知る知識で満たされる。」とまとめられていますが、そこに描かれている情景は、まさに「創世記」の初めに描かれていたエデンの園とは、そのような情景であったかと思わせるほどに、すべての主なる神様によって造られたもの、ことに動物たちが、和やかに生きている姿です。

10節は「その日が来れば、エッサイの根は、すべての民の旗印として立てられ、国々はそれを求めて集う。そのとどまるところは栄光に輝く。」とこの箇所がまとめられています。そこで語られている事柄は、先週の2章の内容と連続する部分があります。「その日」がいつの日であるかは、2章の時と同じように明確ではありませんが、決定的な何かが起こる日を示していることは確かです。1節で触れられた「エッサイの根」という言葉が繰り返され、ここではその言葉が主語となっています。「民」は、『聖書（旧約）』では非常によく用いられる一般的な言葉ですが、ここでは複数形で用いられています。それゆえに「すべての民」と「新共同訳」は「すべての」という形容詞を補

って意識しています。新しい「聖書協会共同訳」と古い「口語訳」では、「もろもろの民」となっています。すべてではないにしても、多くの人々にとって、エッセイの根から出た方が、「旗印」として立てられることを意味します。「旗印」は、他の箇所でも「旗」（出エ 17：15、イザヤ 5：26、エレミヤ 4：6）、「旗竿」（民数 21：8, 9）と訳されていますが、何かを示すしるしを意味しています。その「旗印」に「**国々はそれを求めて集う**」とあるのですが、ここにある「国々」は、先週の 2 章 2 節の「**国々はこぞって大河のようにそこに向かい**」にある言葉と同じです。ここでも大国を含めた多くの人々が、エッセイの根から出たしるしを目指して集まると語っています。そして、そうであるがゆえに、「**そのとどまるところは栄光に輝く**」と断言されるのです。「新共同訳」では主語が「その」となっており、とどまるのが「旗印」のように受けていますが（「口語訳」も同じ）、新しい「聖書協会共同訳」では「**彼のとどまるところは栄光に輝く**」と「エッセイの根から出た人物」であるように受けています。どちらが正しいかは決定することが困難ですが、それが人物であったとしても、その人が旗印として象徴的に意味する何かであったとしても、そこに「**栄光に輝く**」と語られています。この部分は直訳すれば「**彼のとどまるところに栄光がある**」となります。

「栄光」とは、もちろん、主なる神様の「栄光」ですが、この言葉の訳語と、「輝く」という動詞の補いから、何かが目立つように光り輝いているようにも想像してしまいます。確かにそのような意味もあり、それでも良いのですが、「栄光」を意味するヘブライ語には「**重しとする**」という意味もあります。わたしはそこから「**何が重要であるかが示される**」そのような意味でとることが良いと思います。エッセイの根から出た方が示されること、それはこの世界で最も重要なことであるということです。そして、それは先週と同じく、主なる神様に対する謙虚な思いにほかなりません。

さて、降臨節第二主日の福音書は、A B C 共通して、洗礼者ヨハネの「**荒野で呼ばわる声**」としての物語が選ばれています。今年は A 年ですから、「**マタイによる福音書**」の物語が選ばれています。洗礼者ヨハネは、今まで見て来た「**イザヤ書**」の預言と、そこで示されている未来、そして、今行すべき「**正義**」を自覚していたと思います。何の前提もなく、荒野で行動し始めたわけではありません。洗礼者ヨハネ自身は、「**イザヤ書**」は、エッセイの株から出た「**若枝**」ではありませんでした。しかし、洗礼者ヨハネは、自分が活動している時よりも 500 年以上前の預言を、そこにある希望を今の事柄として声をあげたのでした。

この「**若枝**」は、わたしたちにとってはもちろん主イエス・キリストです。その「**若枝**」が示されてからすでに 2000 年以上が経過しましたが、世界はまだ混乱の中にあります。だからこそ、わたしたちはその「**若枝**」の誕生を祝い続けたいと思います。そして、来るべき日の救いの完成、まことの平和の実現を待ち望みたいと思います。